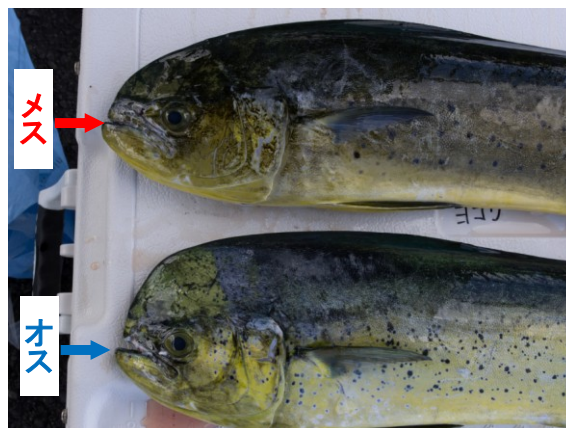


## シイラ *Coryphaena hippurus*

雄の成魚は頭部の前方、額の部分が前に張り出し、独特の外観を示します。県内では単にシイラと呼ぶほか、トーヤク、クマビキ、マンビキなどと言う場合もあります。漢字では鰯と書くように、旬は初夏から夏で、刺身、焼き物のほか、塩干品や練り製品などにも加工されています。高知の夏を代表する食用魚の一つで、近年はブランド化も推進されています。遊漁の対象としても人気があります。



### 生物特性

シイラは全世界の熱帯から温帯海域に広く分布しています。日本近海では初夏から盛夏にかけて北上し、初秋から晩秋にかけて南下するという季節回遊をします。1歳で尾叉長 38cm、2歳で 68cm、3歳で 90cm、4歳で 108cm、5歳で 122cm に成長すると推定され、最大で 175cm まで成長します。尾叉長 60cm をこえると成熟します。産卵は水温 20℃以上の温帯・熱帯域で行われます。産卵期は春から夏で、1匹の産卵数は 8 万粒から 100 万粒と考えられています。

### 県内の漁獲動向

本県においてシイラは主に「シイラ漬けまき網」や定置網で漁獲されています。「シイラ漬けまき網」とは、シイラが流木や流れ藻などの漂流物につく、という習性を利用した漁法で、長さ 10m ほどの竹を束ね、シイラが来遊する海域に設置して、集まったシイラを網で巻く漁法です。明治 36 年に高知県水産試験場が試験的に設置し好漁だったことから、その後、土佐湾内に広く設置されるようになりました。現在は、主に県東部の手結や県西部の興津の漁業者が出漁しています。

県内の「シイラ漬けまき網」による年間水揚量は、平成 5 年までは 1,000 トンを超える年が多く、昭和 62 年には 1,764 トンが水揚げされました。その後は概ね 600～800 トンの間で推移し、平成 24 年以降は 800～1,000 トン程度で推移しています(図 1)。一方、「シイラ漬け巻網」の 1 日 1 隻当たりの水揚量 (CPUE) は、2011 年までは 300～400kg/隻で推移していましたが、2012 年以降はやや増加し 500～600kg/隻で推移しています。

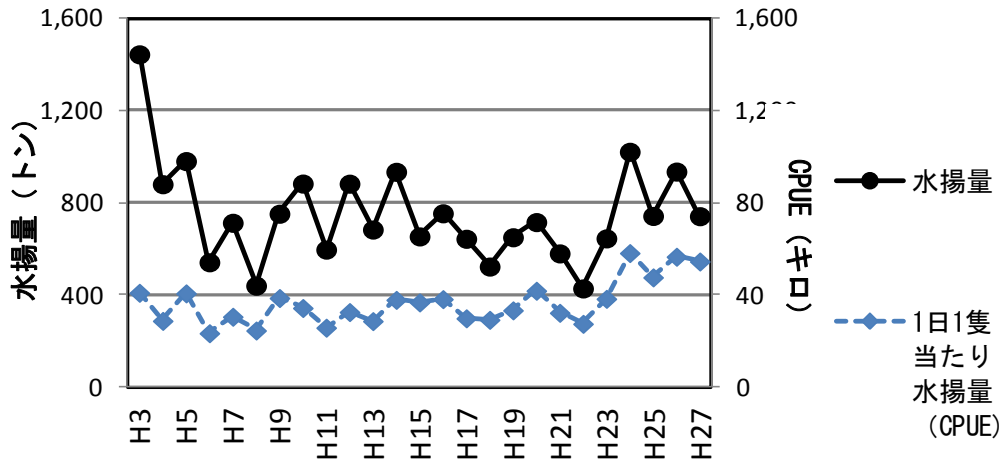


図1 高知県のシイラ漬けまき網によるシイラの年間水揚量及び1日1隻当たり水揚量 (CPUE)

シイラ漬け巻網漁の漁期は主に4～12月で、6～9月の夏場に多く漁獲されます(図2)。漁期の初めには大型魚が多く、8月以降は中・小型魚が主体となり、漁期の終わりには再び大型魚が混じって漁獲される傾向があります。

本種は、シイラ漬けのほかに、各地の定置網や曳縄でも漁獲されます。定置網では春から初夏(4～6月)に多く漁獲されます(図3)。

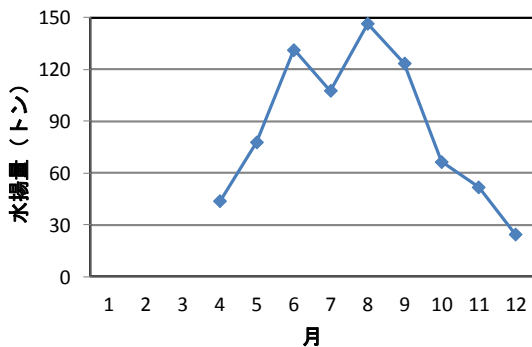


図2 高知県のシイラ漬け巻網によるシイラの月別水揚量(平成22～27年の平均)

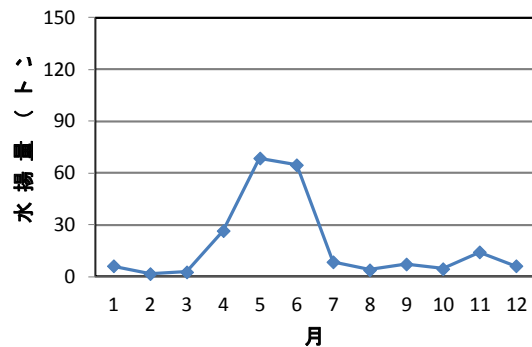


図3 高知県の大型定置網によるシイラの月別水揚量(平成22～27年の平均)